

博士論文審査要旨

論文審査担当者

主査	明星大学	教授	島田博祐
副査	明星大学	教授	星山麻木
副査	明星大学	教授	廣瀬由美子
副査	早稲田大学	教授	梅永雄二

申請者氏名 清水 浩

論文題目 自閉症スペクトラム児者の職業生活に結びつためのライフプラン構築支援モデルの開発—TTAPを活用して—

本論文は、知的障害特別支援学校高等部における一般就労希望の自閉症スペクトラム症（以下 ASD）の生徒を対象に、学校から就労に向けての円滑な移行支援を図り、将来の充実した職業生活、社会生活を送ることを目指した支援モデル案の提起を目的としたものである。

具体的には、ノースカロライナ大学で開発された ASD 児者に対する療育方法である TEACCH プログラムを実施するためのアセスメントとしての TTAP（TEACCH Transition Assessment Profile）等を中心的に利用しながら、評価・指導が一体化したキャリア教育に係る指導方法を開発し、それらを集約して、特別支援学校高等部における ASD 生徒のための包括的なカリキュラムモデルとしての「ライフプランを構築のための支援モデル案」を提起した内容である。

1. 論文構成

第 1 章では「問題の所在」として、本研究の背景になった我が国における障害者関連の法整備、キャリア教育推進の経緯、ASD 児者の就労支援の現状と課題について、国内外の文献を精査し、まとめあげている。

第 2 章以降は、実践研究の部分であり、第 2 章「研究目的と方法」では、研究の方法論や全体像について示されている。研究は大きく 2 つに分かれ、研究 1 が「TTAP を活用した就労支援に関する研究」、研究 2 が「自閉症生徒への就労移行支援に関する研究」となっている。更に細かく見ると、研究 1 が 3 つの小研究（TTAP を活用した進路指導、現場実習事後学習と自立活動の学習内容比較検討、TTAP インフォーマルアセスメント（CSC）地域版の開発）、研究 2 が 2 つの小研究（自閉症生徒の自己理解を深める支援に関する研究。自閉症生徒のライフプラン構築に関する研究）から構成

されている。

第 3 章に研究 1、第 4 章に研究 2 に係る結果と考察がそれぞれ示され、それらの知見をもとに、第 5 章の総合考察へと結びつけられ、最後に、特別支援学校における ASD 生徒を対象とした「職業生活に結び付くためのライフプラン構築支援モデル試案」が示されている。

以下に博士論文の審査経過と評価及び審査結果を記す。

2. 再提出までの経緯及び、本年度の予備審査で指摘された修正採択への対応

前年度の提出では、(1) TTAP におけるインフォーマルアセスメントを中心とした臨床事例の分析から具体的な指導方針を導き出し、ASD 児のキャリア支援に関し実践を通じ有効性を検証し報告した教育現場に資する内容であること、(2) その過程で TTAP インフォーマルアセスメントの修正版、地域の実情に合わせた CSC の地域版などを開発していること等がストロングポイントとして評価されたが、ウィークポイントとして、(1) 個別事例から得られた知見を総合してのモデル化が十分でなく、論題のライフプラン構築支援モデルの開発に至っていないこと、(2) 特別支援学校高等部のキャリア教育に係る教育課程における知見の生かし方に関する言及が不十分であること、(3) これまでの ASD 児のキャリア教育に関する先行研究の記述（教育課程、指導法、アセスメントなど）が少ないこと、(4) 論文書式にも不十分な点が多いことなどが指摘された結果、不可となり、本年度の再提出となった。

提出後の事前査読及び口頭試問の過程で、各委員から (1) 図表、文献等に関する表現表記の修正、(2) 論文構成の部分的見直し、(3) 研究 1, 2 の内容が若干拡散しすぎたことと総合考察との間の関係性が見えにくくなっている点が指摘された。

上記 (2) と (3) に関しては、実践研究をよりわかりやすくするために、キャリア教育における TTAP を用いた評価・指導に関する応用案、副次的なツールとして用いた、自己理解のための ICF（国際生活機能分類）を含めた、総合的なライフプラン構築支援モデルの流れをより系統的に配列し、論理的に記すよう修正依頼を行った。これらの指摘事項及び修正依頼に対し、学位申請者は誠実に対応し、内容の整理と拡充が図られ、博士論文として必要な基準を満たす内容となった。

3. 内容の評価

第 1 章では、詳細な先行研究の文献検討を通じ、特別支援学校における自閉症のある児童生徒の割合が 39.6% になり、これに対応できる教員の専門性向上が緊急課題であること等が示され、就労移行支援に関する研究動向が、十分に整理されており、本研究における問題提起、研究目的につなげている点は高く評価できる。

第 2 章以降の実践研究で評価できる点として、第一にアセスメントツールである「キャリア教育指導における TTAP の活用可能性を広げた意義」がある。具体的には、進路指導や現場実習への事前学習のみでなく、自立活動の教育課程との連関を図ったことがあげられ、事例研究を通じ実証的に現場の教員が利用しやすい評価と指導

が一体化した実践的なキャリア教育の指導モデルを示したといえる。

二点目として、「TTAP インフォーマルアセスメントの修正版、CSC の地域版の開発」があげられる。TTAP を教育或いは就労支援の現場で有効に活用していくためには、産業構造など地域の実情に合わせたカスタマイズが必要であるが、TTAP に関する実践例は少ない。今回の地域版の開発はその先駆となるものと考えている。

三点目として、「TTAP とソーシャルストーリー、ICF 関連図を併せ、生徒の障害受容、自己理解を進める指導案を提起し効果を実証した点」がある。将来の充実した地域生活、就労を実現させるために、適切な自己理解に基づく障害受容は不可欠な要因である。しかし、自己理解のための教育はともすれば理念的になりがちで、実用的な指導案は少ない。その中で、この点に関する教育支援が特性上困難な ASD 生徒に対する試みは、今後の特別支援教育に資する有意義な内容である。

最後に四点目として、上記の評価と指導が一体化したキャリア教育の指導モデルを集約して、高等部三年間のカリキュラム案として、「職業生活に結び付くためのライフプラン構築支援モデル試案」を示した点も先駆的と肯定的に捉えたい。

但し、「ライフプラン構築支援モデル試案」につなげていくために、研究内容が若干拡散的となった点、時間の関係で同試案の有効性に関する検証が行われていない点などが課題として残った。

4. 総合評価（審査結果）

新たな検査・指導法の開発ではなく、TTAP など既存のツールを基盤にした研究である点が、独創性に若干欠け、ウィークポイントともいえるが、教育や就労支援の現場に資するために、評価と指導を一体化させた実践的な指導案、カリキュラムを提起したことは、今後の ASD 児者のキャリア教育支援を考える上で、先駆的な試みと捉えることができ、高く評価できる。

また、多大な労力を要する本研究を日々の実践の中で推進してきた姿勢と、論文内容の社会的貢献度は、上記のウィークポイントを補って余りあるものと考えている。従って、博士学位申請者に学位を授与するに足る論文および口述試問の内容であると考え、慎重に審査した結果、合格と判定した。

よって、本研究は博士（教育学）の学位を授与するに十分価値あるものと認める。